

## イスラーム・ジェンダー学科研 2020 年度『巣ごもり読書会』

イベント名：「再帰的近代のアイデンティティ論」

日 時：2021 年 5 月 21 日（金）

会 場：Zoom を用いたオンライン開催

司 会：後藤 絵美（東京外国語大学 AA 研）

報告者：安達智史（近畿大学）：社会学理論、多文化社会論、ムスリム女性研究

討論者：鳥山純子（立命館大学）：文化人類学、ジェンダー研究

2021 年 5 月 21 日（金）に、第 9 回目となる巣ごもり読書会が開催された。今回の課題図書『再帰的近代のアイデンティティ論—ポスト 9・11 時代におけるイギリスの移民第二世代ムスリム—』（晃洋書房, 2021 年）の著者である安達智史氏（近畿大学）が最初に問題意識や著書の概要についての報告を行い、その後討論者である鳥山純子氏（立命館大学）により討論主題の提起がなされ、それをベースとしながら全体でも闊達な議論が行われた。

安達氏の報告では、最初に「再帰的近代」や「アイデンティティ論」といった理論的関心や問題意識の説明が行われたのち、イギリスのムスリムに関する背景の説明、及び著書における研究調査の分析結果についての説明がなされた。豊富なインフォーマントの語りに基づく分析からは、イギリス社会に生きるムスリム／ムスリマたちが、9.11 以後の（英国にとっては 7.7 以後の）イスラモフォビアが蔓延る社会空間の言説にいかにか立ち向かい、いかにかイギリス社会の中でムスリムであろうとしているのか（ムスリムであるというアイデンティティを保持したまま、イギリス人であろうとしているのか）、というダイナミズムが明らかにされた。

討論では、語りの分析や解釈の仕方、イスラーム的知識の獲得方法やそこで獲得される知識の内容について、エジプトやインドネシア、米国を研究対象地域とする研究者も加わりながら議論が交わされた。総じて、今回の読書会は会の締め括りにおける長沢代表の言葉にもあったように、「異業種の研究者間での学術交流の場」として非常に有益な会であったといえよう。

\*\*\*\*\*

報告文執筆者自身は、現代中東におけるサラフィー主義の思想と行動について、特にエジプトと湾岸諸国を対象地域として研究を進めているが、本著における分析の結果として明らかにされた「＜文化／宗教＞の区別」や「イスラーム的知識」についての議論について、特に興味深く伺った。

前者について言えば、（討論者である鳥山氏からも指摘があったが）＜文化／宗教＞の使い分けによる宗教の再定義は、本著のインフォーマントにのみ見られる現象ではなく、他の地域や他の思想潮流においても見られるように思われる（注 1）。様々な主体が言説活動や実践を行うなかで、いかにか「＜文化／宗教＞の区別」を動員しているかに着目すること

によって、現代におけるイスラームのダイナミズムや、その中でもある特定の思想潮流を構成する要素（例えば、現代において「サラフィー主義的である」とはどういうことなのか、など）をより明らかにすることができると考えられる。報告文執筆者の専門であるサラフィー主義に関して言えば、近年欧州におけるサラフィー主義を扱った成果も複数刊行されており（注2）、なかでも英国におけるサラフィー主義を扱ったものとしては[Hamid 2016, Inge 2018]などがある。Inge[2018]は本著（『再帰的近代のアイデンティティ論』）同様、インフォーマントの語りをもとにした分析であり、比較検討してみると、本著が対象としている「イギリス人であること」と「ムスリムであること」を両立させようとするムスリム／ムスリマがいかに自身のアイデンティティを規定しようとしているか、ということがより明らかになるのではないだろうか（注3）。

また、前者の＜文化／宗教＞の区別を可能にしているものとして、「イスラームの『知識（knowledge）』」に着目がなされるが、第8章で論じられる情報化を通じた＜知識＞の平準化による「信仰の民主化」[安達 2021:277]は、著者自身も指摘するように、必ずしもリベラルな方向性のみ働くものではない。討論の中でも指摘があったように、伝統的な知識を求めるムーブメントも確かに存在し、さらには保守的なことを推奨する論調やその背景にあるイスラーム的知識がメインディスコースとなるような現象も見受けられる。保守的な言説が台頭する構造や背景、及びその思想ネットワークの今日的動態（注4）を解明するためにも、「イスラームの知識」が情報化によって「開かれた」現代において、伝統的な権威や宗教的指導者がいかなる言説活動を展開しているのか、また伝統的／保守的な思想に共鳴する人々はいかにしてそれらの言説と「つながって」いるのか（個人がいかにイスラームの知識を形成するのか）、ということに着目する必要がある。引き続き報告文執筆者自身も今回学び得た気付きをもとに探究を重ねたい。

#### 注：

（注1）例えば、20世紀後半以降に見られた「イスラーム復興」という現象において、そこで再主張される「イスラーム」とは、単なる前近代への回帰ではなく、近代西洋との対比の中で新たに再構成されたもの（「創られた伝統」／「発明された伝統」）であるとする、「イスラームのオブジェクト化」の議論などを参照[大塚 2015:156-195; Eickelman & Piskatori 1996:22-45]。また、サラフィー主義者について言えば、彼ら／彼女らは＜文化／宗教＞を使い分けること（例えばある慣習をビドア[逸脱]であるとして批判、棄却の対象とするなど）によって、「サラフィー主義的なイスラーム」を唱え、宗教の純粋性を保とうとしているとも捉えることができよう。

（注2）例えば、[Adraoui 2020, Hamid 2016, Inge 2018]など。

（注3）その逆、すなわち「イギリスにおいてサラフィー主義的であろうとするムスリム／ムスリマ」についても然り。

（注4）従来のような、ウラマーとその弟子といった物理的に「知の鎖」があること以外にも、気に入った思想や共鳴する思想に信奉者自らが「つながり」に行くようなネットワークのあり方。

**参考文献：**

- Adraoui, Mohamed-Ali. 2020. *Salafism Goes Global: From the Gulf to the French Banlieues*. Oxford University Press.
- Eickelman, Dale F. & James Piscatori. 1996. *Muslim Politics*. Princeton University Press.
- Hamid, Sadek. 2016. *Sufis, Salafis and Islamists: The Contested Ground of British Islamic Activism*. I.B.Tauris.
- Inge, Anabel. 2018. *The Making of the Salafi Muslim Woman: Path to Conversion*. Oxford University Press.
- 安達智史 2021 『再帰的近代のアイデンティティ論—ポスト 9・11 時代におけるイギリスの移民第二世代ムスリム—』 晃洋書房.
- 大塚和夫 2015(2000) 『イスラーム的：世界化時代の中で』 講談社学術文庫.

\* \* \* \* \*

**英語報告：**

The 9th Online Book Talk (Sugimori Dokusho-Kai) was held on Friday, May 21, 2021. A recent book by Dr Satoshi ADACHI from Kindai University, titled *Identity Theory of Reflexive Modernity: Second-Generation British Muslims in a Post-9/11 World*, published by Koyo Shobou, 418 pages (『再帰的近代のアイデンティティ論—ポスト 9・11 時代におけるイギリスの移民第二世代ムスリム—』), was the assigned reading. The session began with the author, Dr ADACHI, giving an overview of his book. It was followed by Dr Junko TORIYAMA from Ritsumeikan University sharing her thoughts on the book and leading a stimulating discussion.

Based on the narratives shared by a large pool of interviewees, Dr ADACHI explained the dynamism with which "Muslim/Muslima" in the British society confront the discourse of Islamophobia and try to reconstruct the idea of being a British Muslim.

Attendees actively participated in discussions around how to analyze and interpret the narratives of the interviewees, Islamic knowledge, and ways of acquiring it.

In the age of globalization, cultural backgrounds are becoming more diverse worldwide. Recent discourses perceive Islam in an essentialist way, labelling it as an "other" which is incompatible with "us." It is important to break away from such an essentialist understanding and focus on how "Muslim/Muslima," have reconstructed their Muslim identity in contemporary British society to deal with Islam itself. Dr ADACHI's insights based on the concept of "Reflexive Modernity," are not only important for understanding the dynamism of "Muslim/Muslima," but also the way we look at "others/others' cultures."

\* 報告作成：米田 優作 (立命館大学大学院国際関係研究科 博士前期課程)